



認知意味論の方法 : 経験と動機の言語学

吉村, 公宏

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

1999-06-23

(Date of Publication)

2014-01-14

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2347

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.11501/3156497>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002347>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	吉 ^{よし} 村 ^{むら} 公 ^{きみ} 宏 ^{ひろ}	（奈良県）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）	
学位記番号	博ろ第11号	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
学位授与の日付	平成11年6月23日	
学位論文題目	認知意味論の方法 経験と動機の言語学	

審査委員	主査 教授 柴谷方良	
	教授 松嶋隆二	教授 西光義弘
	教授 山縣 熙	助教授 窪 蘭 晴 夫

論文内容の要旨

目的と位置づけ

将来、20世紀の言語研究を顕著に特徴づけるであろう事実の一つは、おそらく、記述主義的な言語事実の集積の時代から、事実の集積に通底する説明理論的なモデル提示の時代へと移行したことであろう。たとえば、構造主義においては、音声的事実を基に音の分布・環境を記述し、高次の抽象的・心理的音単位である音素の配列とその規則性を探り出した。生成理論では、言語習得が短期間の間に達成され、母国語話者で文法性の判定が一樣となる等の事実から、人間という種に特有の言語能力を措定し、その能力の形式的明示である普遍文法モデルの構築を目指すことになった。本論文が依拠する認知言語学（Cognitive Linguistics）もこうした移行期の流れの中で誕生した一つの説明モデルに過ぎない。しかしながら、言語論を幅広い理性観の系譜において位置づけるとき、認知言語学の視点は、主として次の点において従来の文法モデルと異なる。言語は、環境となる外的世界と主体となる人間との相互作用の中での認知活動の所産であり、他の一般的な認知機構から自律した存在としての言語能力の顕現にはとどまらない。たとえば、事物・事態をカテゴリー化して認知する能力は一般的なものであるが、言語だけがこの種のカテゴリー化から無縁であるとは考えにくい。また、推論の中には、演繹的推論だけではなく経験的・発見学習的ななされる推論もあり、それは文レベルを超えた文脈レベル、ないしは談話レベルの言語活動に貢献しているはずである。

本論文は、こうした言語の理性観ならびに方法論的なパラダイムの移行期にあって、新しい意味理論の構築への貢献を意図して書かれたものである。音声学、語彙論、統語理論等の諸分野においてめざましい発展を遂げる近年の言語研究の中で、意味の解明はひとり立ち後れているといっても過言ではない。その原因のひとつは、明らかに、意味研究の方法論が未だ十分に確立されていないことにある。意味は音声などのように客観的な形式に還元できず、また、語や句、あるいは文という単位に区切って特徴づけることにも限界がある。意味の解明は、科学としての還元主義的な客観性を拒む要因を本質的に孕んでいると言える。しかしながら、一方で、人間の認知活動の多くが言葉を通しての世界理解であることを考えると、ことばの形式と世界理解とを結ぶ意味論の研究は、急務であるばか

りでなく、今や最も重要な課題となりつつある。

こうした方法論的な困難さと研究の重要性との大きな乖離の中で、本論文が投げかけた問いは次のようである。言葉という媒体を通して、またそれに負って達成される「意味」とはいったい何かということ、世界理解を規定する（あるいは、創造する）一般的な知識の中で、意味の関わる知識がどのような位置を占めるのかということ、意味を記述するためのより妥当な方法論を確立するためには、どのような要因が加味されなければならないかということである。

以上の論点から、本論文は、まず、言語研究に対する近年の理性観の系譜を概観する。第二に、結果的にはあるものの、認知パラダイムへの移行を促進した生成文法理論による説明モデル、とりわけ意味の扱いに対し批判的な検討を行い、認知言語学的なアプローチの有用性を説く。第三に、経験基盤主義的（*Experientialistic*）な認知言語学に基づいたケース・スタディを展開する。各はケース・スタディは、言語プロトタイプ論に立脚した意味カテゴリー、統語カテゴリーの分析を中心に、日英語比較という手法のもとで進められた。最後に、本論文の結論、問題点、ならびに今後の理論的方向性を示唆する。言語学が経験科学として成立するためには、説明のための理論モデルを提示するだけでなく、同時に、当該モデルが依拠した方法論の妥当性を検証する必要がある。そのためには、実証研究による裏付けが重要な課題となる。調査によるケース・スタディを重視したのは、ひとつ、基礎的研究資料の蓄積に資するという面ばかりでなく、その資料が含意する他の妥当な理論的方向性を開示しておくためでもある。

主張と展開

認知言語学の誕生は認知心理学（*Cognitive Psychology*）の知見から多大の貢献を負っている。カテゴリー化は認知スキーマに触発されて生じる事例・状況のゲシュタルト的認識の顕現である。プロトタイプのカテゴリー化とは、典型的事例から周辺的事例に至る連続的傾度の観点からカテゴリー化の内部構造を特徴づける概念である。この新しいカテゴリー観は古典的カテゴリー観——事例の等価性、必要・十分条件的な特性の具有、カテゴリー境界の分断——に本質的な改変を迫る力を持つと同時に、隣接諸科学の研究にも多大の影響を及ぼした。認知言語学における言語のプロトタイプ論も影響を受けた隣接分野のひとつである。たとえば、事例認知における典型性・傾度性の概念は、早くも Ross（1973）における「名詞性の度合い（*Nouniness*）」で指摘され、「因果関係のゲシュタルト認知」は言語カテゴリーである「他動性」（Hopper and Thompson 1980）、「主語」（Shibatani 1985）、「動作主性」（Lakoff 1977, 1987, Van Oosten 1977）といった言語的な諸概念に基礎的動機付けを与えた。統語形式と意味との有契性の理論（Langacker 1987, 1991）に基づく限り、いかなるレベルの統語形式であれ、程度に応じて慣習化された意味を担っている。言語カテゴリーが一般的な認知カテゴリーに組み入れられると言うとき、それは多様なレベルの統語形式が一定の認知スキーマ（知覚・認知のゲシュタルト）並びに経験知識（文脈推論的知識、発見学習的知識、等）に動機づけられた（*motivated*）形で意味と結合しているということである。そこで、本論のケース・スタディでは、語（*lie*／「嘘」、名前）、句（所有表現）、文（中間文）という言語形式を題材に、それらが一定の文脈・状況下でどのような意味ないしは意味カテゴリーとしての構造化を持ちうるのか、また、どういった認知スキーマ・経験知識が、それら形式と意味との有契性を動機づけているのかを探る。

四つのケース・スタディは以下のようなものである。第一に、英語 *lie* と日本語「嘘」の意味構造の比較・分析を通して、Coleman and Kay（1981）のカテゴリーモデルを批判し、状況認識的な視点を取り入れた新しい意味カテゴリー論の必要性を説いた。語の意味構造を明らかにするためには、意味要素を

還元主義的に捉える Coleman and Kay のようなプロトタイプ論では不十分である。文脈理解に働く推論、語の使用に付随して喚起される百科事典的知識、さらに会話の原則等の語用論的・言語行為論的な制約に動機付けられた知識が、意味の記述・解明に不可欠であることを論じた。さらに、調査分析を通じて日米の文化モデル論的な差異も検証し、族類似 (Family Resemblance) の観点から類縁語 (「社交辞令」「言い逃れ」「事実誤認」など) とのカテゴリー関係についても考察した。第二に、名付け (naming) という言語行為を特徴づけた。固有名には「ふさわしさ」の直観が働くが、そうした直観が母国語話者の間でどの程度一致するのか、それはどのような知識に由来するのか。そもそも、事物には最もふさわしいと感じるような名前が存在するのか。Carroll (1985), Lehrer (1992) を出発点に、調査分析を通して、名前と指示物との照合に働く表示性 (representativeness) と表現性 (expressiveness) の相関を明示する知識モデルを提示した。それは、観点化属性 (perspectivized properties) を共有するようなドメイン (Domain) の存在が、名の「ふさわしさ」を動機づける知識として働くということである。第三に、「所有 (possession)」を表す言語形式と指示される意味領域の問題を論じた。英語の「所有」についてはすでにプロトタイプ仮説から説明がなされている。すなわち、表現形式――補部 (John's) と中核語 (book) ――は、「所有」概念の典型的実現から周辺の実現まで、一定の意味のプロトタイプ要素の充足度によって特徴づけられるとするものである。しかしながら、本論では、日本語においてこの仮説が十分に働いているとは言えないこと、中核語の意味には、特定の参与者 (participant) を選択する知識が潜在的にプールされており、それが両者の合成を動機づける知識として機能することを主張した。さらに、「同定 (identification) という指示機能的側面が二つの要素の結びつきに関与していることを指摘した。第四に、英語の中間文 (middle expressions) を論じた。中間文とは *John's books sell well* のような、典型的には能動形の動詞がその主語に非生物名詞を取るような構文であり、制約の多い構文とされてきた。当構文の最も大きな問題は、次の三点である。何故、当構文の文法形式が属性表現と結びつくのか。多くの場合、主語名詞が人工物を指示するのはどうしてか (宣伝・広告表現に多く見られる)。一般的な他構文と比べ、容認性の揺れが激しい事実 (異なる文例間のみならず、一つの文例に対しても) をどのように説明するのか。本論は、生成文法理論で実質的な議論をされなかった幾つかの説明概念――「総称性 (Genericness)」「影響性 (Affectedness)」「動作主性 (Agentivity)」――に対し、批判的検討を加え、認知意味論的視点からの説明を行った。Lakoff (1977), Van Oosten (1977, 1984) ら、認知言語学を基礎にした分析においても不十分である。むしろ、彼らの指摘するように、中間構文の容認可能性を決定づける要因のひとつは語自体の文法特性であろう。しかしながら、現実のデータを幅広く見てみるとそうではないことがわかる。上記の問題に答えるためには、次の諸点を看過してはならない。語の文脈上の使用的意味を重視しなければならないこと、とりわけ、語が喚起する付随的意味 (百科事典的知識) と語用論的な要因を軽視すべきでないこと、また動詞の意味上のクラス分けには経験的・慣習的知識による動機づけが潜在していること、である。

結論と展望

四つのケース・スタディを通して得られた結論は、言語使用というひとつの記号現象の中に潜在する法則性の存在である。その法則性とは、生成文法理論のいう客観主義的な自律性のもとに顕現する法則性ではなく、人間の主観性、ないしは経験主義的な理性活動の現れとしての言語の法則性である。スキーマの形成、ならびに経験を通して得られたスクリプト的・発見学習的知識はわれわれの世界理解を促す。それらは、一定の認知カテゴリーとしてわれわれの言語活動を支える。言語カテゴリーが

認知カテゴリーと有機的な連関性を持ち、かつ、言語活動一般が種々の言語的カテゴリーにおいて特徴づけられるものであるとするならば、言語活動は認知カテゴリーに動機づけられた認識活動のひとつである。「意味」とは世界理解の様式と不可分である。この点において、意味の解明は、上記の認知モード並びに経験知識が所与の文脈・状況の中で活性化されることによって成し遂げられるものである。プロトタイプ・カテゴリー論を基軸に展開された本論はこの帰結に経験的な実証性を与えた。

しかしながら、残された問題も多い。たとえば、本論文は、人間の身体性が所与の文化モードに規制された存在であるとの視点を前提し、言語現象もそうした身体性の現れと考えている。そうした前提の中で、では、言語のプロトタイプ分析がどれほどの普遍的な説明力を持ちうるのか。換言すれば、文化モデルの領域固有性 (Domain Specificity) と言語カテゴリーの普遍的特質との相関の問題である。たとえば、本論で論じた「相互作用的属性」は、属性の発現に関わる認知を身体経験に求める立場からのものである。身体経験が所与の文化モードに規制されているとするならば、この種の認知を言語カテゴリーに転換する様式も多様でありうる。また、属性間の含意関係も普遍性の高い種類のものから、文化ごとに相対性を持ちうるものまで存在することを示唆した。本論の考察範囲は日英語におけるいくつかの言語現象の域を出るものではない。今後は、多様な文化に遍在する言語カテゴリーと領域固有的・文脈依存的に稼働される言語カテゴリーとの相関を更に考究する必要がある。

論文審査の結果の要旨

本書は、認知論的観点に立脚した、新しい意味理論の構築を目指して書かれている。特に、プロトタイプ論に基づいた言語分析を行い、語の意味および文法形式の諸側面には認知に関わる原理やプロセスに動機づけられた言語カテゴリーが存在し、そうしたカテゴリーは、人間の経験的知識を基盤としていることを日英語対照研究の手法のもとに実証することを目標としている。

構成は、理論編と事例研究からなり、序章と第1章において本書の理論的基盤を説き、第2章から第5章にわたって、事例研究を通しての理論の検証及びその展開が試みられている。各章のテーマと内容の概略は以下の通りである。

まず序章においては、文法知識の解明及びその獲得という現代言語学理論の中心課題について、生成文法理論と認知言語学によるアプローチの相違を概観し、言語運用を研究対象とし、連続的かつ総合的文法モデルを想定する認知言語学の立場が言語の本質に迫る、より有効な研究パラダイムを提供すると説く。

第1章は、本書の理論的骨子となるプロトタイプ論の紹介に充てられている。プロトタイプのカテゴリー論を概説し、言語単位である、語、句、文構造それぞれのレベルの意味現象には、プロトタイプのカテゴリーの形成が見られることを指摘し、この理論の有効性を論じる。

第2章では「嘘」という概念を巡って、日米間の差違を分析の手がかりにし、意味要素を還元主義的に捉える先行研究に対して、文化モデル論的視点の重要性を論じ、経験知識に動機づけられた、新しい意味カテゴリー論の展開を図っている。

第3章の「名前の『ふさわしさ』考」では、名づけ (naming) というプロセスに絡む言語的・認知的諸要因を分析することによって、恣意性のなかに潜む法則性を見出そうとする。

第4章「日米『所有』比較論」では、英語の John's book, 日本語の「ジョンの本」に代表される所有表現の意味解釈について、再び日英対照研究の観点から考察する。

第5章「中間構文と属性認知」においては、英語の His book reads easily に代表される、いわゆる

中間構文の成立を巡り、日本語の可能表現や自発表現と対照させながら分析を進め、議論の多いこの構文タイプについて一つの方向を明確な形で提示している。

終章「プロトタイプ論を超えて」では、以上4章にわたる事例研究を振り返り、今後の展望を模索する。ここでは、言語と認知の接点が織りなす諸々の言語現象の解明には、「状況」を含めた広義の文脈依存的側面の考慮、それとともに、文化相対論的な視点によるプロトタイプ論の展開の必要性などが説かれている。

以上のように、本書は新しい意味論の展開を求めて、理論的枠組の構築と、そのような枠組みにおける日英語対照研究の有効性を追求したものであるが、論文審査においてもこの二つの課題が議論の中心となった。

まず理論的枠組についてであるが、本書において吉村氏は、意味論研究におけるプラトタイプ・カテゴリー論の導入を説いている。当然問題となるのが、理論的基盤となるプラトタイプ・カテゴリー論それ自体のカテゴリー化理論としての成熟と、その応用にあたっての理解と解釈である。プロトタイプ概念を言語学に適用する研究は多く見られるが、それらではプロトタイプというものを如何に理解するかという点については明確な答えが出されていない。本書においても同様の傾向が見られ、プロトタイプにまつわる諸概念の整理が望まれるところである。ただし、この問題は本書に固有のものでなく、言語学におけるプロトタイプ論の適用が明確な理解と統一的な見解のもとで行われていないという、学界における同理論の取り扱いを巡る曖昧性を反映したものであると解釈することができる。

以上のように、本書の理論的基盤となるいくつかの要件はいまだに言語学界において明確にされていないものが多く、本書でもそれらについて十分な検討、および提唱されている枠組の肉付けが十全にされていないきらいがある。しかし、このような状況にありながらも言語学の基礎研究、つまり個々の言語現象の記述は進めなければならない。本書も意味論について、その基盤整備は不十分ながらも、一つの流れに沿って日英語の対照研究を具体的に進めることによって、理論の詳細や詰め、そしてそれが正しい方向を向いているかどうか、結果として示されているであろうという態度を研究方略としていると言えよう。

したがって、本書の本領はその言語学的分析にあると見做され、本書の約4分の3を占める、第2章以降の事例研究がそれにあてられる。

第2章以下において、「嘘」という語の意味分析(第2章)および命名(naming)(第3章)については、語レベルの意味論を、そして所有表現(第4章)においては、句という単位の意味論、そして第5章の中間構文に関しては、文レベルの意味論を取り扱っている。それぞれの言語単位において、アメリカその他での先行研究を踏まえ、英語の資料と日本語における対応現象とを比較・検討し、いずれの事例研究においても、従来の分析は語義ないし構文論的研究に終始する傾向があつて、それぞれの表現の使用パターンおよびそれを左右する文化的コンテクストが十分に加味されていないことを指摘する。これらの先行研究に対して、日英語間に見られる意味的差異は文化的背景によるとするのが、吉村氏の主張である。

例えば、「嘘」という語の意味分析については、米国人が言明の事実性の認識を重視するのに対して、日本人は言明の結果を重視すると解釈し、意味の決定は、単に意味プロトタイプ要素のみによることなく、各言語の文化的要因が密接に絡んでいるという主張を展開している。同様に、所有表現についても、アメリカ人は、人間を中心とした事物との関与性を重視する傾向(“Person focus”)を示すのに対して、日本人は場の状況をベースに、物事との関与性が強い(“Situation focus”)とする、John

Hinds の説に平行的な結論を導き出し、ここにおいても、文化モデルを取り込む言語分析の重要性を示唆している。

さらに、命名における「ふさわしさ」という概念や、中間構文の発生メカニズムについても、それぞれには認知的動機が働いていて、一見恣意的にみえる言語行為にも、その適切性を支配する認知的原理が見出せると主張し、統語論を中心とした分析の限界を明らかにした。

最初に述べたように、理論的枠組の展開においてはその基盤をなす諸概念のいっそうの明確化が望まれる点があり、また具体的な事例研究において用いられている統計分析などについてより望ましい統計処理法が適用されるべきであると思われる個所も指摘できる。しかし、意味論が極めて貧弱であるチョムスキー理論に取って代わる研究パラダイム、そして統計処理など具体的な資料処理の方法などを模索中の言語学の現状にあって、意味論研究について一つの明確な方向を示したこと、そして日英語比較研究において新しい局面を切り開いた点など、本書の学術的意義は大きいと判断される。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者吉村公宏が博士（文学）の学位を授与されるに足りる資格を有するものと判定した。